

北海道足寄町における伝統的な樹木の名前と利用法 およびその知識の消失

内海, 泰弘
九州大学大学院農学研究院環境農学部門森林環境科学講座

古賀, 信也
九州大学大学院農学研究院環境農学部門森林環境科学講座

<https://doi.org/10.15017/7172205>

出版情報：九州大学農学部演習林報告. 105, pp.1-4, 2024-03-22. The Kyushu University Forests
バージョン：
権利関係：



北海道足寄町における伝統的な樹木の名前と利用法およびその知識の消失

内海 泰弘, 古賀 信也

北海道十勝地方への入植者の子孫で、足寄町に居住し、年齢および従事期間の異なる林業従事者の樹木利用文化について聞き取り調査を行い、樹木利用文化とその消失過程を検討した。その結果、高齢の林業従事者ほど樹木名とその木材の利用方法に関する知識を持っていた。また比較的若い年齢の林業従事者でも、薪を利用した生活を営んでいる林業従事者は、化石燃料を利用している林業従事者よりも各樹種の木材の材質に関する知識が豊富であった。一方でアイヌ語に由来する樹木名は認められなかったことから、アイヌ文化との直接的な関係は確認できなかった。なお、最年長のM氏は子供時代にアイヌの人々を子供も含めてよく見かけたと話していたが、和人とアイヌとの木材利用文化の交流は認められなかった。足寄における木材利用の伝統的文化は木材を利用する機会が減るに従い急速に失われていることが示唆された。

キーワード：木材、足寄町、方言、伝統的利用

Based on the interviews with the descendants of settlers of different ages in the Tokachi region of Hokkaido, who lived in Ashoro Town and worked in forestry for different years, the traditional tree use culture and the process of its disappearance in Ashoro town was investigated. Older forest workers had more knowledge about tree names and the usage of wood. Furthermore, even among relatively young forest workers, those who using firewood had more knowledge about wood property of each species than those who used fossil fuels. No direct relationship between Japanese and Ainu culture was recognized. It was suggested that the traditional culture of wood usage is rapidly disappearing as opportunities to use wood decrease.

Key words: wood, Ashoro, dialect, traditional usage

1. はじめに

北海道では1869年に札幌に開拓使が設置されて以降、和人の入植による土地の開発が進められてきた。現在の十勝総合振興局に属する足寄郡足寄町においても和人の入植が1912年から中足寄地区で始まり、戦後にも町内への入植が行われた。1949年には西足寄村（後に西足寄町）に九州大学農学部附属北海道演習林が設置され、1955年には西足寄町と足寄村が合併し足寄町となった（足寄町2021）。

これまで北海道での木材利用の文化と歴史については、先住民族であるアイヌの人々が利用してきた樹種の用途等についての聞き取り調査結果（更科ら1976；福岡1995）、あるいはアイヌ自身の経験に基づいた木材利用についての記録が存在する（萱野1978）。しかし、アイヌの伝統的な木材利用に関する文献と比較して、開拓当時に入植し、北海道の環境で生活のために木材を利用してきた和人による木材利用の記録とその後の変遷についてはほとんど報告されていない。そこで本研究では足寄町に和人が入植を始めてからの木材利用の文化とその変遷について明らかにすることを目的とした。

2. 調査方法とインフォーマント

北海道十勝地方への入植者の子孫で、足寄町に居住し、現在も九州大学北海道演習林で林内作業を行っている4名の林業従事者を対象に木材の伝統的利用法について聞き取り調査を行い、伝統的樹木利用文化とその消失過程を検討した。2023年時点のインフォーマントの年齢と林業従事年数は、A氏81歳63年、B氏77歳37年、C氏66歳45年、D氏50歳17年で、入植者の子孫としては、A氏は3代目、B氏とC氏は4代目、D氏は5代目である。なお、C氏は現在も暖房用熱源として薪を主に利用しており、他の3名は化石燃料を使用していた。

2023年7月に上記4名に対し、北海道演習林で生育している木本植物37種の伝統的な利用法について対面形式で1名ずつ、著者ら（古賀・内海）で聞き取り調査を行った。調査対象の種リストは九州大学演習林で発行しているカラー図鑑（九州大学農学部附属演習林2000）の北海道演習林自生種のリストから抽出した。

3. 結果と考察

聞き取り調査の結果を表1に示す。針葉樹ではカラマツを含む4種の利用が報告された。なお、カラマツは北海道

表1 足寄町における樹木の方言名と用途
Table1 The traditional name and usage of trees in Ashoro

学名 Latin name	和名 Japanese name	方言 Local name	用途* Usage
針葉樹 Softwood			
<i>Taxus cuspidata</i>	イチイ	オンコ	柱材 (1/4), 鉛筆材 (1/4)
<i>Picea ezoensis</i>	エゾマツ		柱材 (1/4), 屋根材 (コケラ茸き) (1/4), トドマツより少し硬い (1/4)
<i>Abies sachalinensis</i>	トドマツ		物干し竿 (1/4), 長い棒 (1/4)
広葉樹 Hardwood			
<i>Fraxinus langrinosa</i>	アオダモ		櫓の曲げ木 (1/4) バット材 (4/4)
<i>Elaeagnus umbellata</i> var. <i>umbellata</i>	アキグミ		薪材 (1/4)
<i>Ostrya japonica</i>	アサダ		薪材 (1/4)
<i>Aria anfolia</i>	アズキナシ		薪材 (1/4)
<i>Acer pictum</i>	イタヤカエデ		実を食用 (1/4)
<i>Maackia amurensis</i>	イヌエンジュ		柱材, 薪材, 鉛筆材 (2/4)
<i>Betula maximowicziana</i>	ウダイカンバ		臼材 (1/4)
<i>Malus sachalinensis</i>	エゾノコリンゴ		実を食用 (1/4)
<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. <i>kamtschatica</i>	エゾニワトコ		実を食用 (1/4)
<i>Salix caprea</i>	バッコヤナギ		高級な板材 (4/4)
<i>Lespedeza bicolor</i>	ヤマハギ		畑の支柱 (1/4)
<i>Tilia maximowicziana</i>	オオバボダイジュ		板材 (2/4)
<i>Cerasus sargentii</i>	オオヤマザクラ		スキー板 (1/4) 箱物, 細工物 (1/4)
<i>Ulmus laciniata</i>	オヒョウ		樹皮を丈夫なロープとして利用 (1/4)
<i>Juglans mandshurica</i>	オニグルミ		屋根材, 床材, 銃床材, 材の狂いが少ない (1/4)
<i>Quercus aliena</i>	カシワ		薪材 (2/4)
<i>Cercidiphyllum japonicum</i>	カツラ		薪材 (1/4), 萌芽枝は畑に雑草が生えないように畝の脇に並べた (1/4), 材は細工がしやすく丈夫 (1/4)
<i>Empetrum nigrum</i>	ガンコウラン		実を食用 (1/4)
<i>Phellodendron amurense</i>	キハダ		大黒柱 (1/4), 実が胃腸薬 (1/4)
<i>Actinidia arguta</i>	サルナシ		ツルはかんじきの材料 (1/4), 実が食用 (4/4), 霜が降りたあとは甘みが増す (4/4)
<i>Padus ssiori</i>	シウリザクラ		乾燥すると腐りにくい竿材 (1/4)
<i>Betula platyphylla</i> var. <i>japonica</i>	シラカンバ		樹皮を焚き付け (2/4)
<i>Tilia amurensis</i> Rupr. var. <i>koreana</i>	シナノキ		鉛筆材 / 版木 (2/4)
<i>Aralia elata</i>	タラノキ		芽を食用 (4/4)
<i>Sasa nipponica</i>	ミヤコザサ		家畜の餌 (1/4)
<i>Schisandra chinensis</i>	チョウセンゴミシ		実を食用 (1/4)
<i>Populus suaveolens</i>	ドロノキ		マッチの軸木 (1/4)
<i>Sorbus commixta</i>	ナナカマド		枝をかんじきに加工 (1/4)
<i>Hydrangea paniculata</i>	ノリウツギ		箸 (1/4)
<i>Syringa reticulata</i>	ハシドイ		非常に腐りにくい, 箸材, 柱材, 地面にさす杭材として一番長持ちする。小屋の柱材, 燃えにくく薪材には適さない (4/4)
<i>Kalopanax septemlobus</i>	ハリギリ		食器材 (2/4), 家具材 (2/4)
<i>Ulmus davidiana</i> var. <i>japonica</i>	ハルニレ		燃えにくく薪として不適 (2/4)

*: () 内の数値は調査者数に対する用途認識人数

*: Number in parentheses is number of people recognized for use to the total number of people investigated.

演習林での主要な造林樹種で換金作物であるため、今回の調査リストには掲載していない。本調査では一般的な和名ではない樹木名は針葉樹のイチイだけであった。この結果は、過去に宮崎県椎葉村大河内集落で行われた樹木の方言

名に関する結果 (内海ら 2007) と著しく異なった。樹木の伝統的利用が引き継がれてきた同地区では、記載された 70 種の中で標準和名ではなく方言名が用いられていたのは 47 種と半数以上を占めていた。他方、様々な地域から移動し

てきた足寄町の入植者にとっては郷里の樹木の方言名を用いることは難しかったと推定される。なお、イチイは現地では「オンコ」と呼ばれ、柱材や鉛筆材として利用されていた。「オンコ」の名はアイヌ語のようにも思えるが東北地方の方言とされ（木村 2005）、アイヌ語では「クネニ」とも呼ばれる（萱野 1978）。北海道には開拓の初期に東北地方の仙台藩などから多数入植しており（菊池 1994）、北海道との距離も近いことから東北地方の文化の影響が大きかった可能性もある。エゾマツはトドマツより少し材が硬いので柱材やこけら葺きの屋根材として用いられた。トドマツは物干し竿などの長い棒が必要ときに使われた。

広葉樹の用途としては 32 種が認識されており、様々な樹種が薪材として利用されていたが、とくに材密度が高く、ある程度の幹材積があるアサダ、イヌエンジュ、カシワ、カツラなどの高木となる樹種の材が好んで用いられた。一方でハルニレの材は、水分を多く含み燃えにくいいため薪として不適と認識されていた。

アオダモは今日ではバット材として有名であり、全員がその認識があったが、最も年齢の高い A 氏は、以前は積雪期に馬により人や物資を運搬する馬轡（ばそり）の曲げ木材として重用されたとの認識があった。横山ら（1961）が 1957 年に実施した北海道 6 自治体における移動手段の調査では、冬季の移動手段として馬轡が男性で 32.5%、女性で 14.7%とされており、馬轡が当時の主要な移動手段の一つになっていたことがわかる。そのためかつては馬轡材に適した樹種の知識が住民間で共有されていたと考えられる。また北海道での伐木運材作業では主として冬季に馬と木材搬出用の玉轡（たまそり）と呼ばれる轡を用いて材を搬出しており（天川 1936）、玉轡材としての需要は高かったと考えられる。玉轡の材料としては極めて弾力に富みかつ摩滅しにくい樹種を選ぶ必要があり、天川（1936）はカエデ、ナラ、カバ（カンバ）材が適するが主にナラ材が用いられていたと報告している。今回の調査においてもアオダモに加えイタヤカエデが馬轡材に適すると認識されていた。両樹種とも強靱で緻密な材を持つことが知られている（平井 1970）。このように各樹種の材質特性に関する情報は当時の住民にとっての基礎知識になっていたと考えられる。

また上述の横山ら（1971）による移動手段の調査では、夏は徒歩や自転車、オートバイが主要なものとされているが、冬になると徒歩が男性で 53.8%、女性で 78.4%と大部分を占めていた。積雪時の徒歩では移動の労力を軽減できる「かんじき」が必要とされる機会が多かったと推察される。「かんじき」の材料としては、軽くて強く、加工しやすいものが求められるが、今回の足寄町の調査でもナナカマドの枝やサルナシのつるを「かんじき」に加工し利用していたとの認識があった。ナナカマドの枝は強靱であり、サルナシのつるも強度が大きく吊り橋の材料にもなることが知られている（内海ら 2010）。現地で得られる植物材料として、合理的な種選択が行われていたと考えられる。

本研究で聞き取り調査を行った 4 名の年齢は A 氏 81 歳、B 氏 77 歳、C 氏 61 歳、D 氏 50 歳であり、いずれも林業従

事者で、樹木に対する関心が一般市民よりも高いと思われるインフォーマントであるが、用途を認識していた樹種数は、最年長の A 氏の 30 樹種が最大で、他の 3 名のそれは、B 氏 22 種、C 氏 20 種、D 氏 15 種とかなり少なく、加えて年齢が若くなるとともに減少した。また薪を利用した生活を営んでいる C 氏は、化石燃料を利用している B 氏、D 氏よりも各樹種の木材の材質に関する知識が豊富であった。4 名全員が用途を認識していた樹種は、アオダモ、エゾノバッコヤナギ、タラノキ、ハシドイの 4 種だけであった。アオダモはバット材、エゾノバッコヤナギは高級な板材、タラノキは芽を山菜として、ハシドイは耐腐朽性のある杭として認識していた。ハシドイはアイヌでも伝統的な家（チセ）を作る際にも柱材としても利用されている（更科ら 1976）。耐腐朽性の高いハシドイはアイヌだけでなく和人にとっても重要な木材資源であったと考えられる。一方で木材に限らず様々な資材が利用可能となった現在では、地域の木材を利用する機会が減り、かつて地域で共有されていた木材利用の知識はその必要性が低下するとともに急速に消失したと考えられる。

なお、インフォーマント最年長の A 氏は幼少時代足寄町内でアイヌの人々が身近に生活していたことを記憶していたが、言語が異なることから木材利用に関するアイヌと和人ととの交流は容易ではなかったようで、木材利用の文化交流が行われていた事実は確認できなかった。

引用文献

- 足寄町（2021）足寄町の歴史. <https://www.town.ashoro.hokkaido.jp/kurashi/about-town/gyosei/town/detail.html>
2023 年 10 月 10 日参照
- 天川一行（1936）雪上運材. 日本林学会誌 18：1058-1067
- 福岡イト子（1995）アイヌ植物誌. 草風館 p.241
- 平井信二（1970）木の百科. 朝倉書店 p.642
- 萱野茂（1978）アイヌの民具. すずさわ書房 p.320
- 菊池芳樹（1994）北海道開拓移民の研究：伊達土族移民の移住と定着. 盛岡大学紀要 13：139-147
- 木村陽二郎（2005）花と木の事典. 柏書房 p.589
- 九州大学農学部附属演習林（2002）九州大学の森と樹木. 九州大学演習林. 政府刊行物普及株式会社 p.159
- 更科源蔵・更科光（1976）コタン生物記 I 樹木・雑草篇. 法政大学出版局 p.265
- 内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上晋（2007）宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 I. 高木. 九州大学農学部演習林報告 88：45-56
- 内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・宮島裕子・井上晋（2010）宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 III. つる, 竹. 九州大学農学部演習林報告 91: 15-18
- 横山尊雄・船木幹也・菊池弘明（1961）北海道農村の集落構成：主として住民の日常生活の面からの調査研究. 北海道大学工学部研究報告 25:85-133

謝辞

インタビューを引き受けていただいた森文雄様，山田勝四郎様，新妻喜代志様，山田勝美様，北海道演習林の情報を整理頂いた九州大学農学部附属演習林北海道演習林の山内康平様に感謝申し上げます。本研究は日本学術振興会科研費 JP20K20730 の助成を受け実施した。

(2023年10月20日受付：2024年2月26日受理)